

## 「H氏の反乱」

総園長 宮下 智

彼は至って真面目だ。真面目の塊のようにして、この50数年を生きてきたのだった。

風邪をひいて熱がある時、職員は尋ねた。「大丈夫？」彼は、必ず答えた。「だいじょうぶ！」

「洗濯もの、ついでだから洗おうか？」彼の答えは、いつでも「いいよ、自分で洗う！」だった。

「通院、車で送ろうか？」そんな誘いも必ず断る彼だった。「自転車で行く！」

「仕事、疲れなの？」一日立ちっぱなしのお菓子の箱詰めの話に向けても、「疲れしない！」「大好き！」が彼のいつもの答えだった。

だから彼は、いつでもみんなの見本だった。グループホームができた30年前、やはり入所施設からの旅立ちの第一号候補者は彼だった。就職もした。休むこともしないで、10年以上、毎日、縫製会社でのワイシャツのアイロン掛けに出かけた。入所施設から出たと思ったら寮生活だった。そこはもっと頑張らなくてはいけない場所だった。バブルがはじけてリストラにあつて、解雇された。休む間もなく企業センターで働いた。雇用者にとって、几帳面で、真面目な彼は、どんな作業においても、常に即戦力且つ必要不可欠な戦力だった。いつもプレッシャーの中で働いた。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

児童施設入所から50年、グループホームに出てから30年、彼の喜びは自転車に乗ることだった。グループホームに出てからも、毎週末、必ずグループホームから1時間以上自転車を走らせて学園を訪ねてきた。途中、道に落ちている缶を拾い、捨てられた菓子袋を拾いながら来るものだから、学園に到着する頃には、左右両ハンドルには、ごみで一杯のレジ袋が4つも5つもぶら下げられていた。雨の日も風の日も乗った。学園訪問の後には、I病院にこれまた一時間以上かけて出かけていくものだから、時には、お尻の皮が真っ赤に向けた。それでも彼は「痛くないよ！」と乗り続けた。

彼の要求は、ほとんど自転車に関することばかりだった。「パンクした」「ライトがつかない」「自転車カバーが欲しい」「新しい自転車が欲しい」…、要求も会話の話題も自転車のことが中心だった。パンクが治れば、ご機嫌になり、ライトが直れば、ご機嫌になった。

彼は時に多弁になる。決まって、好意を寄せる職員との別れや、今は、K市に住んでいる兄がたった一人の家族として面会や帰省を行なってくれているのだが、その日程が決まっていなかった。私たちは苦しいのに、寂しいのに逆に明るく振舞うことで、その苦しさや寂しさを隠そうとしている彼の心情を思った。

彼の父親も母親もすでに無い。しかし、私たちには彼の寂しさを埋め合わせることができるほどの情報も支援方法も無かった。そこで、その別れの寂しさを埋めるためにと、仏壇を用意した。それが昨年6月のこと。寂しい時には、寂しいと言ってもいいんだよ、それがメッセージだった。亡くなった父、母であるけれど、「いつでもあなたのそばにいますよ」「あなたがあなたらしく生きることを応援しますよ」、そして、「苦しい時、寂しい時には、いつでもお父さんやお母さんにお話しをして下さいね」そんなメッセージを込めて、仏壇は、父や母の写真とともに彼のグループホームの居室に置かれたのだった。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

すると、彼は、体調を崩すようになった。就労継続B型の日中活動の場で、血圧が低下するのだ。高血圧の薬を飲むほどの彼が、血圧低下である。そしてあろうことか脈拍が少なくなってしまうのだ。決まって、高齢者施設の掃除を始める前の時間だった。さっそく降圧剤の服薬を止めたが、血圧の低下も脈拍の数ももとは戻らなかった。昇圧剤も効き目が無かった。「このままでは生きていくことができないよお～、死んじゃうよお～」言葉にならない心の叫びを身体が教えていた。

そこで今度は、作業の内容の負担を考えた。「お掃除、大丈夫？」と聞かすが、いつものように「大丈夫、好きだよ」と答える彼だった。それでも「頑張りすぎ」を想定した私たちは、まずは仏壇の父や母に「自分らしく自分の決めたように生きていきます。応援して下さい」と彼と一緒に話しかけた。日中活動の場に行ったり、休んだり、そして具合が悪くなったと言ってもは早退したり…、そんな毎日が続いたが、彼の行動を支持的に受け止め続けた職員集団だった。

そんなこんなの1ヶ月、彼は、仕事を少なくしようという職員の提案を受け入れて、介護事業所の掃除から、タオルたたみの仕事へシフトすることに同意してくれた。それが8月、日中活動の事業所とのケア会議も順調に経過して、新しい日課が確定した。これで彼の血圧と脈拍は、正常値に戻ったのだった。もちろん、昇圧剤の服薬は継続しているのだが…。

そして、明けて1月。12月末に罹患したインフルエンザはとっくに直っているはずなのに今度は咳が止まらない。本人は「咳が出るから」と言って、事業所を休んでいる。聞けば「1月31日まで休む」と言う。あれほど「仕事はするもの、休むべきものではないこと」と唱え続けてきた本人の頑な新しい自己主張である。

そこで、明星学園「お心主義辞典」。「咳がでる」は、「伝えたい思いがつかえていて出てこない」と通訳する。

再び、作業内容の検討だ。立ち仕事の高齢者入所施設の掃除から座り仕事のタオルたたみへ、職員の相談は、身体的にも心理的にも負担の少なくなる方向へと彼を誘う。時にそそのかす。

彼は、作業所に行ったり行かなかったりを繰り返しながら、また行っても昼寝をしていたり、静養をしていたり、早帰りをしたりと、自分を見つめ続けているようだ。

そして、この4月、彼は週3日だけ、事業所に通うことを決めた。残りの2日はグループホームで「のんびり」だそうだ。

そして、この6月上旬。彼の買い物の要求は「光と音の出るパトカー」だった。さて、このパトカーの要求、「僕は、悪い子ですよ〜」というサインなのです。だってパトカーって悪い犯人を捕まえて、乗せる車でしょ！そこで、相談「仕事、どうしようかあ…?」、すると、彼はいとも簡単に「やめる…」と答えたのだった。「仕事をやめる」と考えるような子は、彼にとってはパトカーに乗せられてしまうような悪い子だったので。

私たちは、応援する。「ずっと、ずっと頑張ってきたんだよね。仕事を真面目にする人がHさんにとっては、ずっと良い子だったんだね」「もういいんだよ、50年も頑張ってきたんだから、そろそろ休んでもいいんじゃない?」「これからは、本当に自分のしたいことを探していくんだよ」「それには、まず休むことが大切さ、休んでいると自然にやりたいことが出てくるんだよ」

そして、6月30日に仕事をやめることを決心した彼に聞く。「その後、どうするの?」彼は答えた。「遊ぶ!」。



実は、彼の自転車は彼の分身だ。彼が頑張っているとき、彼は、毎日、自転車を磨く。自分の頑張りをまるで褒めたたえるかのように。そして、少しでも故障すれば、すぐにイライラして修理を切望する。まるで自分の心が傷ついてしまったのように。彼がわがままも言わず良い子で暮らしているとき、彼は自転車を何時間も乗り回す。彼はきっと「頑張るぞ!頑張るぞ!」と念じながら、ペダルを踏み続けていたに違いない。

7月から彼は、学園の日中活動スペースわくわくで暮らしている。以前よりもはるかに話題豊富にしゃべって、皆と自然と一緒にいる時間が確実に増えている。周りに対するお世話焼きも本当に少なくなった。もともと素敵だった笑顔に磨きがかかった。自慢のミニカーをグループホームから持参して遊んでいたりする。「遊ぶ!」と伝えた1ヶ月前の宣言通りだ。彼がこれから手に入れようとしているもの、そして、この50年の人生で得ることができなかったもの、それは、自分の生まれてきた理由を探す時間だ。まだまだ時間はたっぷりある。そして、私たちもその道をずっと一緒に歩かせてもらいますね。それが児童入所施設入所以来、悪気はなかったとはいえ、頑張らさせ過ぎてしまった私たちの責任だと思っています。どうぞこれからも宜しく!

彼は、今、ほとんど自転車に乗ることが無い。そしてあれほど大切にしていた自転車は、カバーもかけられずに放置のままである。彼は、この一年をかけて、頑張りの印を捨てることができたのだ。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.coocan.jp>

Facebook : <https://www.facebook.com/satoru.miyashita.1>